

長屋刃傷

泉鏡花作

全一章

後から聞くと、種々複雑な事がある。盛夏三伏、暑さも今を頂上といふ午後一時半、奥でうと／＼して居ると、何か同一番地の長屋内で、物騒しい音がする、と思つた。

一寸々々と、けた／＼ましく兄妹が呼ぶから、飛起きて表の三疊の窓から見ると、筋向ひの植木屋で、二三人取組み合つて居る、中に肴屋の女房といふのが押殺されたやうな疲れた聲で、大變だよ。

大變だよ。

大變ですなえ、と慌て切つて却つて落着いたやうに應ずるのは、砲兵工廠の職工の家の留守居の年増で。それに一人の色の蒼褪めた少い男の、この暑いのに襯衣を着て久留米の紺緋の古びて黄んだのを片膚脱になつて、小刀を閃めかして居る奴の胸倉を取つて戸へ壓へ着ける。肴屋のは背後から腰を抱いて

揉んでるので、自分が覗いたトタンに三人入亂れて
どた／＼と後へ雪崩れたと思ふと、斬つた！ とい
ふ聲。腰へ掛つたのが尻居に倒れた。同時に開放し
た自分の家の縁側へ、庭からむつくりと飛上つたの
は、裸體の婆さんで、吃驚して振向く時、跣足で六
疊の室を衝々と驅けて来て、自分達が立つた表の
室の襖へぴつたり、丁ど佛壇がある處へ、灸の痕だ
らけの干からびた背を見せて附着いて、助けて下さ
いまし、助けて下さいまし。婆さんお前は？ と、
屹と聲を懸ける、暫時お祕しなすつて、と目も据ら
ずきよろ／＼して震へて居た。

謂ふまでもない。對手は之と見て取つたが、此處
ぢや不可い、と言つて、がた／＼腰に應のない、難
物の手を取つて、引張つて勝手へ入つた。・・・
處は閉切つてある、明窓も引かないで、北向、隠れ
るには暗くて可からう、と押入れると、又きよろ／
＼した。
何と思つたか、土間へ下りて、口を開けた炭俵の
陰へ入つて、塵取に湯具を敷いて畏つて自分を拜ん
だ。其まゝ舊の處へ引返すと、何時の間にか早や四

五人、小兒交りに窓の前へ集つて、がや／＼騒々しい。

何うした、といつて聞いた、格子戸にもべつたり、乾いて日の光りが射返すやうな眩い地の上も朱の滴つた痕があつたが、取押人が怪我をしたのではない。肴屋のも職工のも無事なので、小刀を振つた男が、自ら其の手の指を過失したが、發奮んで血の色を見ると眞蒼になり、流れるやうな指の血を塗りつけた、格子戸のは其である。

それから兇行者は、向うの角の駄菓子屋の裏口から、九尺二間を横切つて店を跨いで、大塚の通へ抜けたが、突切る時足許の六疊に寝かしてあつた、其の駄菓子屋の小兒の浴衣で、又指の血を拭つたさうな。其なり、覺えて居ろ、と一纏めに九軒の長屋の屋根を睨めつけて、よろけながら、巢鴨の方へ見えなくなつたとのことである。

など／＼口々に言ひ罵る處へ、彼の婆さんの忤の嫁で、二十二三な美しいのが髪を散し衣紋を亂し、落こちるやうな、左孕だから喘ぎ／＼、血色もまだ面へ返らず、灰のやうに變りながら、絞りの浴衣を小

脇に抱へて、一群の前へ来た。背後からついて来るのは、南京邸の共 同妾、晩方から枕を入れた風呂敷包を片手にちよこ／＼褌取りの、しやならで路地を駆けて出て、先方では一晚押入の中で寝て、明方に戻る、と井戸端で取沙汰する長屋随一の美人のお袋、後家で四十餘りのでつぷりと肥つたの。銜楊枝で毎朝井戸端で顔を洗ふと、やがて朝飯を食べて、其手で、長煙管と地切の一寸蒼臭い荒刻の煙草の箱とを持つて、片手を懐にしたまゝ、軒別に油を賣つて歩行くのが、鐵漿をつけた四角な口を歪めながら、まあ、危ない、すんでの事だね、この嫁が殺られる處さ。いえ、お婆さんを突殺さうとするものだから、夢中になつて留めたは可いが、たゞの身體ぢやありませんまい。

身重な處へ、巔倒したもんだ、何うして／＼いきなり仰向けに倒れた上へお前様、野郎め、ひいッてえ聲だから、命がけで私が驅着けた時は、小刀の尖が（手眞似で見せて、）これんばかり、どうやら斯うやら、引外して戸外へ突出したのさ。え、お婆さんかい、お婆さんは、と自分が立つてるのを見

て、會釋して、此方のお臺所・・・ぢや然うお
しな、と極りの悪るさうに俯向いて居る身持の嫁を
居みつゝ、兎も角も遁すが可いやね、さあ、と押す
が如くにして、連れて勝手口へ行つた。

少時ごた／＼して居たが、やがて彼の婆は、嫁が
持つて行つた、其の絞の浴衣を着て早急の場合、穿
物は忘れたと見える。内の上草履を穿いて、井戸に
近い處から、こつそりと顯れると、まあお婆さん／
＼と、窓の前に居た連中、どつと其へ集り眞中に婆
を取巻いて、ぞろ／＼と路地を出たが、一同木戸口
に立つて巢鴨の方を見遣る中から、婆は、身を挺い
て衝と通へ出ると、矢の如く、傳通院の方へ走るの
が見えた。

扱て、お喧しうござりましたと、例の肥つたお袋
は、後刻出直して庭口から這入つて来て、何ね、彼
の婆さんと來た日にや、顔色でも知れませう、一條
縄でいくのぢやあございませんや。お長屋に居りま
す植木屋さんの妹で、彼の婆さんの娘にね、旅で藝
者を稼がしてありましたとさ。植木屋さんは彼の通
おとなしうございますけれども、妹の方が婆さんに

肖にてしたゝか者もので、彼あの男をとこの家藏いへくらを嘗なめたんですと。
女房持にやみほりもちで兒こもあるんですつて、其それで食くふや食くはずに
なつて女房にやみほりにまで棄すてられた頃ころを、ちやんと見切みきつ
て其それツ切きり、藝者げいしや殿姿どのすがたを隠かくしたんですとね。お袋ふくろとは
ぐるだらう、怨うらみも何なんにも言いはないから、居所あどころを教をしへ
てくれ、死ぬし前に唯ただ一ひと目逢めくあひたいからツて、昨夜ゆうべ
から來きて動うごかないで居をりましたつけ。婆ばあさんはふて
／＼しくしらを切きつて居あたんですが、壁かべ一重ひとへでこ
ざいますから、私わたくしどもへは能よく聞きえます。思おも詰ひつめて
居あるらしい、いまに騒さわぎが始はじまるだらうと、やきも
き思おもつてたら案あんの定ぢやういゝえ暗くらい處ところがあるですから、
交番かうばんへは届とけられないのでございますよ。あいよ、
いま行ゆくよ、と小兒こどもが呼よぶのに返事へんじをしなから、件くだん
の長煙管ながぎせるで持參ぢさんの煙草たばこを悠々いう／＼と吹ふかした。

【完】